
私たちの異世界生活録

暁 高谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちの異世界生活録

【Nコード】

N6155Z

【作者名】

暁 高谷

【あらすじ】

ある日、私は二人の友達とともに異世界に飛ばされてしまった。三人はその魔法や剣がある異世界で何を成すのか。そんなファンタジー。

プロローグ 異世界へ（前書き）

小説は初めて書くので、面白いか自信が無いですが、ひっそりと描いていきます。

プロローグ 異世界へ

私、赤澤光輝^{あかざわこうき}は、同じマンションに住むふたりの友人と下校していた。

そして、マンションのエレベーターに乗り、扉を閉じてしばらくたち――

「おい、何かエレベーター変じゃないか？」

「確かに長いわ。もうとづくに着くはずなのに・・・」

そう、いつまで経っても止まらないのだ。

そして、私が緊急ボタンを押そうとしたとき――

「ッッッ！！！！」

強烈な頭痛に襲われた。

他の二人も頭痛がするらしく、頭を抑えている。

「ッ！あああああああああ！！！！！！！！！！」

「うううう！ぐああっ！」

ふたりとも悲痛な叫び声をあげ、倒れた。
そして私も、気を失った。

プロローグ 異世界へ（後書き）

『私』の友人は男と女一人ずつです。

第二話 異世界（前書き）

初めての操作ミスでデータが吹っ飛びました。

第二話 異世界

「う、ううん・・・」

「ん、目が覚めたのかい？」

「ん？ああ。って！ここは何処だ！」

「まあ落ち着いて。と言っても僕もさっき落ち着いたばかりなんだけどね。」

「そうか。ありがとな、——ん？」

「どうしたの？」

「名前が思い出せないんだ。お前の名前も、か、彼女の名前も、俺の名前も！」

「本当だ！どうしよう？」

「仕方が無い。ところで、俺の身体に異常は無いか？お前は髪が白くなったな、顔も変わってる。」

彼は、顔が変わり、髪も銀色になっていた。

「えー！そうなの！君はあまり変わってないね。髪の色は黒のままだし、目の色がダークグリーンになったぐらいかな？」

「目の色だけか。良かった。」

「前の容姿が好きだったの？まあ、そこそこかつこよかったからね。」

「あまり変わってると戸惑うだろ？だから安心しただけ。」

「彼女は、目の色はわからないけど、顔も変わってるけど、髪の色が若草色になってるね。」

「一番容姿が変わってるな。」

「シヨックをうけるかな？」

そうして俺たちはしばらく周りの大自然を眺めながら話をした。そ

して、彼女が目覚めた。

「——う、うーん。ふああああ。」

「よう。やっと起きたか。」

「起きたみたいだね。良かった。」

「うん。え？こ、ここは何処おおおおお！！！！」

女性特有の高い声で彼女は叫んだ。その声に驚いた鳥たちが飛び去っていった。

俺たちはその声に驚きながら、状況を説明した。

「見てのとおり、ここは異世界だよ。あと、君も僕たちも容姿が変わっているから注意してね。」

「あと、みんな名前を忘れてるんだ。」

「え？ホントだ。思い出せないわ。確かにみんな容姿が変わってるわね。」

「じゃあ、まず人を探そう。何かわかるかもしれない。」

「ああ。」

そうして、俺たちはしばらく森の中を歩いていた。そして――

「おい！ジャッカル！早くしろ！」

「ああ！早くこの森から逃げねえと！だがガイヤ、もう少し待ってくれ！」

「チッ！」

人がいた。俺たちはそのことに安堵しながら、様子を見ていた。

「あの男たちは何なんだろうな？」

「さあね。何から逃げているんだろう？」

「あの人たち変わった格好をしてるね！」

そう、男たちは、外套マントを着て、腰にサーベルを付けていた。そして、何かから逃げようとしているようだ。

男たちは急いで準備をしている。

「もう少し様子を見よう」――

「ガオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「あれは、飛竜！？いや、ワイバーンか！」

「何だとお!？」

俺たちが見たのは、ワイバーンがガイヤと呼ばれた男に襲いかかる
うとするところだった。

「畜生！！もってきたのか！」

ガイヤは腰のサーベルを抜いて、ワイバーンに立ち向かっていった。

「やめろ！ガイヤ！そいつに敵うわけが無い！」

「うるせえ！ やってみなきゃわからんだろう！！」

そう言うって、ガイヤはワイバーンに向かって右手のサーベルを振り下ろした。しかし――

「ッ！！！」

ガイアのサーベルは、ワイバーンの甲殻に直撃したのにもかかわらず、折れた。

そして、ワイバーンはその場で反転し

尻尾の先端の突起をガイヤに叩きつけた！

「ツ！！がはッ！！」

ガイヤは吹き飛んで木の幹に全身を打ちつけ、動かなくなった。

「ガイヤ！ーちい！！」

ジャツカルも戦おうとワイバーンの方に向き、何かを唱え始めた。

「わが世界を統治する神々よ、我が欲するは全てを終わらせる終焉の炎。」

万物を灰と炭に変える残酷な炎なり。その名は獄炎、その役は矢。我が魔力を用いて顕現けんげんせよ！！」

唱え終わると、ジャツカルの前に真紅の炎で出来た矢が出現した。

そしてその矢は一直線にワイバーンへ向けて放たれワイバーンへ直

撃した――

第三話 身支度（前書き）

読んでる人いるのだろうか？まあそんなもんか。

第三話 身支度

そして、真紅の矢はワイバーンへ直撃した――

「な、なんだと・・・」

しかし、ワイバーンは無事だった。左の翼が少し焦げていただけで、流石に無傷ではなかったが。

そしてワイバーンは息を吸いながら、首を振り上げ、振り下ろすと同時に炎のブレスを吐き出した。

そのブレスはジャツカルを飲み込み――
周りの木々をも巻き込んだ。

「すごい・・・」

「私この世界で生きていけるかな？心配だよ・・・」

「魔法があるのか・・・」

ワイバーンは、ガイヤたちを倒して気が済んだのか、遠くに飛び去っていった。

僕たちは、ガイヤたちの残された荷物の中に使える物が無いか探すことにした。

「おい、このサーベル、つかえそうだ！」

「ジャツカルのはうは何もないよ。ブレスで焦げてしまっている。」

「ホントだわ。ん？ガイヤの鞆に、ナイフがあつたよ！」

ガイヤたちの荷物を一通り探したが、あまり使えそうな物はなかった。

「まあ、こんなところだろ。」

「それより、名前を決めない？いつまでも 彼とか 彼女では

大変でしょ？」

「ん？そうだな！」

そうして僕らはそれぞれ名前を決めることにした。

それからしばらく考え……

「よし、じゃあ俺はルークにする。」

「？ルーク？かいいいね。僕は何にしようかな？」

「私は……ミナにする。」

「みんな決定が早いね……」

「悩んでも仕方が無いからな。」

「……僕は、フラストにするよ。」

「よし！フラスト、ミナ、改めてよろしくな！」

「はい！」

「ああ！」

「で、フラスト。今日はどうするんだ？」

「町に行きたいけど、まず食料が必要なのと、町でお金に変えられる物も必要だね。」

そう、町についても一文無しでは意味が無いのだ。

「じゃあ猪とか草食動物狩って来る！」

そういつてルークはいつてしまった

「ま、サーベルもあるから大丈夫だろう。」

「ミナ。僕たちは火を焚くための薪を集めようか。」

「うん。火打石って落ちてないかな？」

「いや、無くても大丈夫だよ。ワイバーンのブレスの残り火があるから。」

そうしてフラストとミナは準備を始めた。

ルークは、森の中を歩いていた。

（草食動物って水辺にいるのだっけ？）

そう思い、川を探していると、二頭の猪を見つけた。

猪の大きさは、元の世界と変わらなかったため、ルークはサーベルを抜き、いつきに距離を詰め、斬りつけた。しかし、皮が厚く、傷は浅かったため、ルークは反撃される前に、斬りつけた猪の頭を突いた。

頭蓋骨を貫かれた猪は痙攣^{けいれん}して動かなくなった。

「まず一頭！！」

堅い頭蓋骨を貫いたので、手が痺れて痛かったが。

仲間をやられ、怒ったもう一頭が突進してきたが、ルークは横に飛んで回避し、猪がもう一度突進しようと方向転換しようとしたとき、ルークは猪の目の近くを突いた。

その猪も動かなくなった。

さっきのワイバーンの事で少し慣れていたが、それでも自分が殺した、という事に気分が悪くなった。

「覚悟を決めなきゃな。」

ルークは一人つぶやいた。

その後、ルークは見つけた川で顔を洗い、フラスト呼びに戻り、二人で二頭の猪を持って帰った。

「ルーク！フラスト！お疲れ！」

「ああ。火を焚いてたのか。」

「ルーク、肉は僕たちで焼くから休んでいて。」

「わかった。」

そう言つてルークは寝転んだ。今はちょうど昼頃なのだろう、太陽の場所から判断できた。

そうしてしばらく寝転んでいると、フラストに呼ばれた。どうやら肉が焼けたようだ。

「はい、ルーク。」

「ありがとう。ミナ。」

「じゃあ食べようか。」

「」「いただきます。」「」

そうして三人は食べ始めた。猪の肉は、油がのっついて美味しかった。

「で、今日は野宿するのか？するにしてもここは危険だろう？」

「うん。だから、今日はこれを食べ終わったら野宿できそうなどころを探すんだ。」

「猪の皮や骨は何に使う？」

「皮は地面に敷いたり、暖を取るのに使う。骨はわからない。」

「骨だったら武器に使えそうだが、微妙だな。」

そして、昼ご飯を食べ終わり、ルーク達は野宿する場所を探した。

様々な洞穴や崖などを探したが、ルークたちは3方向をがけにかこまれた場所にした。これだと猛獣に襲われる心配が少ないからだ。

気がつけばあたりはもう暗くなり始めていた。

「よし、火も焚いたし、お前らは寝ていい。俺が見張っておくから。」

「大丈夫？私は疲れてないし、ルークは寝たほうがいいよ。」

「いや、大丈夫だ。ミナは今日頑張ってくれたし、武器をつかった事のある俺でいい。」

「じゃあルーク。しばらく寝たら僕が変わるよ。それまでは頼んだよ。」

そう言っでフラストは寝てしまった。ミナもちょっと不服そうだったが、一度寝転がるとすぐに眠ってしまった。やっぱり二人とも疲れていたんだなあと思いつつ、ルークは周りに目を凝らした。

（今日は色んな事がありすぎたなあ。）

ルークは今日一日の事を振り返っていた。

異世界。ワイバーン。戦闘。野宿。これ以上大変な日はもう無いと思いたい。

そうしていると、後ろで音がした。フラストが交代しにきたみたいだ。

「僕が変わるよ。君は朝まで寝ていて。」

「ああ。ありがとな。」

フラストに礼を言い、ルークは地面に寝転がった。

しばらく星空を見ていたが、突如睡魔に襲われ、ルークの意識は沈んでいった――

「起きて。二人とも。朝だよ！」

フラストの声でルークは起き上がった。

「ん、おはよう。ミナはまだ寝てるのか。」

「うん。疲れてたみたいだね。やっぱりもう少し寝かせてあげようか。」

「ああ。」

俺たちはミナが起きるまで、森を出る準備や森について話していた。そうしていると、暇が潰しになるし、落ち着けるからだ。

「うう。あーおはよう！」

「起きたか。早く移動しよう。」

「うん。」

俺たちは、早くこの森を抜けることにした。この森にとどまるより、町や村を探したほうがいいと思ったからからだ。

そして、猪などを狩りながら、（ミナは少し取り乱したが、すぐに落ち着いた）森を歩いていった。

すると、木々が少なくなっていく、やがて草原に出た。

「森を抜けたぞ！」

「見て！向こうに人工物があるわ！行ってみましょ！」

そして俺たちは、人工物のある方向に走った。たどり着くと、そこは街道がいどうだった。

つまり、このどちらかに歩いて行けば、町にたどり着くということだ。

俺たちは、とりあえず左の方に歩いていった。

少し速めに歩いていったが、それでも町にたどり着く頃には太陽が真上に昇っていた。

俺たちは疲れきった身体をひきずりながら町に入っていた。

私たちは、ようこそ！カリユートへ！と書かれた看板を横目に見ながら、町に入っただけだ。

「もう休みたい…疲れた！！」

「はあ、はあ。まさかこんなに遠いとは…」

「と、とにかく、宿を探さないと。」

あまりに疲れていたのも、町の人たちに心配されたが、大丈夫だと言ひ、宿を探すために歩き始めた。

大通りを歩いていると、様々な店が並んでおり、私たちは獣の素材を売るためにその一つに入っただけだ。

そして、店主に猪の素材を見せると、店主は驚き、

「これは猪か！あんた達森に入っただけか！今は誰も森に入らんから素材の値が上がっていたんだ。……よし、全部で金貨100枚でどうだ！」

と言った。でも、私たちにこの世界の物価がわからないので、困っている、フラストが言った。

「私たちは、外界と隔離された村に住んでいたし、自給自足だったので、カリユートの物価がわからないのです。教えてくださいませんか？」

店主は快く引き受け、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚だと言ひ、ことがわかった。

大体一般家庭では金貨1枚で、暮らしていけるそうだ。だとしたら、かなりの金額である。

私たちは、猪の素材を金貨10枚で売り、店主に宿屋の場所を教えもらった。

「それじゃあ、ウチの5つ隣にある、？渡り鳥の止まり木？がいい。主もいい奴だからな。」

「わかりました。ありがとうございました。」

そういつて私たちは店を出て、5つ隣の宿屋に向かった。

「ねえルーク。宿屋に行ったら次は何処に行くの？」

「武器屋に行かないか？これから何があるかわからないから武器持つておく方がいいだろ。」

「ルーク！僕たちは何も持っていないんだよ！？まずは服や食べ物を買わないと！武器はそのあとだよ！」

フラストがルークに怒ってる間に、私たちは宿、渡り鳥の止まり木に着いた。

中に入ると、ロビーがあり、奥のカウンターにいた店主が立ち上がって笑顔で迎えてくれた。

「ようこそ。渡り鳥の止まり木へ。何泊にいたしますか？」

「では、3泊の、二人部屋と、一人部屋一部屋ずつでお願いします。後、部屋は隣同士にしてください」

「はい、かしこまりました。合計銀貨15枚になります。部屋番号は二人部屋が5番、一人部屋が4番となります」

店主はそう言つて、番号が書いてある鍵を渡した。

私たちは部屋の前まで行くと、フラストが私に鍵を渡してくれた。

「ミナ。君が一人部屋を使って。僕たちは二人部屋を使っから」

「えー！うん。わかった」

「部屋の確認が終わったらロビーで待っていて。僕たちも終わったら行くから」

私は部屋に入った。一人部屋なのであまり広くないが、それでもスペースはある。

今は何も持っていないので、すぐに鍵を閉めてロビーに向かった。

僕たちがロビーに行くと、ミナを見つけた。僕たちより速かったみたいだ。

僕たちはまず食料屋と服屋にむかい、その後ルークの行きたがっていた武器屋に行った。

「よお！初めての客だな！どんな武器がいい？長剣か？騎士剣か？俺のところは変わった武器も置いてるぜ！！」

「こんにちは。武器は……そうですね、こちらの女の子には短剣を、私たちは色々見てみます。」

「大きな剣は私には持てないもんね？ありがとう」

「俺たちはどうする？フラスト、お前は力強くないだろ。短剣にする。」

「ルークと比べたら弱いけど、普通の人と同じくらいだと思うよ？」

「そうなのか。お、この長剣良さそうだな。」

「じゃあ僕はこの剣を。」

ルークは身の丈と同じくらいの両刃の長剣を、僕は腕の長さくらいの両刃剣を手を取った。

ミナは、大きめのサバイバルナイフのような物を持っていた。

「お！お前らなかなかいい奴を選らんだな。それにするのか？」

「ああ。俺はこの長剣を買う。フラストは？」

「そうですね。変わった武器があると言っていましたね。見せてもらえませんか？」

「わかった！あと、俺の名前はガルムだ！覚えといてくれ！」

ガルムは僕をともなつて店の奥に入っていた。

「これだ。お前さんに使えそうなものはあったか？」

僕は驚愕していた。何せそこには刀やブーメラン、トンファーや片刃剣など、前の世界の文化を取り入れた武器があったからだ。

「どうした？大丈夫か？」

「ええ。凄いです。どこでこんな武器を？」

「ん？行商人がたまに持って来るんだ。遠い地方のものらしい。」

僕はそこに言つてみたいと思った。

もしかしたら昔に異世界に飛ばされてきた人がいるかもしれないからだ。

「では、これをください。」

そういつて僕は黒塗りの刀を取った。

「ん？その剣は鞘から抜けないんが、抜けるのか？」

そういわれたので、フラストは刀を抜こうとした。

最初は抜けなかったが、力を入れる方向を少し変えると抜けたので、

コツがあるのだろう。

「おお！！抜けるのか！それとアンタは珍しい物が好きなんだな。防具屋のエドのところにもこうゆう物売ってるから見せてもらえ。今紹介状書いてやる」

僕は楽しみになった。もしかしたら日本伝統衣装、袴はかまなどがあるかもしれない。

「はい！ありがとうございます！」

そして僕たちは店の奥から戻ってきた。ルークは

「やっと戻ってきた！ってそれ刀じゃねえか！！そんな物あったのか！」

「ええ！私たちの分は無かったの！？」

「ごめん。これ一本しか無かった。トンファーならあるよ？」

するとミナはいらない、と態度を変えて言った。まあ使い方にコツがあるものね、トンファー。

「ガラムさん。長剣と短剣とこの剣でいくらですか？」

「ん？長剣が金貨2枚、短剣が銀貨20枚、その剣は誰も扱えなかったから銀貨30枚だ。」

「わかりました。あと、このサーベルはいくらで売れますか？」

僕はガイヤからもらったサーベルを差し出した。

「？これなら銀貨50枚だ。これで合計金貨2枚だな。」

僕は袋から金貨を2枚出し、カウンターに置いた。

「また来てくれよなー!!」

僕たちはガルムの店を出て、反対側にあるエドの防具屋に入った。

「いらっしやいませー。どんな防具が欲しい？」

エドという男は気さくな性格なようだ。僕はガルムの紹介状を出した。

「へえ。ガルムの紹介か。お前さんは珍しい物が好きみたいだな。こつちに来てくれ。他の二人は周りの防具を見といてくれ。」

僕とエドは店の奥に入ると、中世の貴族の服や、どこかの民族衣装、武者鎧などがあった。

武者鎧は重すぎて着れないので、袴などを探した。しかし欲しいものが無かった。

「すみません。欲しいものはなさそうです。」

「むう。残念。あ、ガルムから買ったものを見せてくれない？」

僕は刀を出し、許可を得てから抜いた。

「おお。これがそうか。ありがとう」

僕は刀をしまって店の奥から戻り、ルークたちがどんな防具を選んでいるか見に行った。

結論。相当悩んでいた。

鎧、と言っても、レザーアーマー、一プレートアーマー（甲冑）、スケイルアーマー、鎖帷子、コートオブプレートなどなど、数多くあるのだ。

「うーん。軽い革の鎧にするか、重い鉄の鎧にするか…いや、男は重装甲がロマンだ！」

「私は重い鎧は着れないから、プレートアーマーは無理ね。この鎧は何なのかしら…？」

「ルーク。重装甲の何処にロマンがある。ミナ。君は重い鎧は着れないから

革のラメラアーマーかレザーアーマーが良いと思う。」

「なっ！！フラスト！じゃあお前は何にロマンがあると——」

「銃ならアンチマテリアルライフル。鎧ならスケイルアーマーや鎖帷子。」

「二人とも話がずれてる。フラスト。あなたは何にするの？」

「僕はスケイルアーマーと鎖帷子にする。動きやすそうだし、奥で欲しいものも無かったからね。

ルークは、金属のラメラアーマーが良いと思う。プレートアーマーは高すぎるし重過ぎる。」

結局ルークは鉄のラメラアーマー、ミナはレザーアーマー、僕は鎖帷子とスケイルアーマーにした。

更にルークと僕には鎖で出来た足首まである腰巻を、ミナには膝くらいまである革のスカートを買った。

「あいよ。全部で金貨3枚と銀貨5枚と銅貨80枚だ。」

「意外と高かったですね。はい、代金です。」

「おう。それより鎧を剥き出して歩き回るのか？マントとか持っているのか？」

「いいえ。ここで売っていますか？」
「ああ。こつちだ。」

見てなかった端のほうに行くと、様々な色の大きな布が置いてあった。

「じゃあこの中から決めてくれ。」

「どうする？何種類かデザインがあるけど？」

「ああ。俺はこのフード無しのシンプルな深緑のマントにする。」
「僕はフードつきの濃紺にするよ。」

「うーん。私はルークと同じデザインの若草色にする。」

「わかった。代金は銀貨30枚だ。負けといてやる。」
「え、ありがとうございます！」

僕たちは代金を払い、防具屋を出た。

「これからどうする？」

「ねえ、魔法の事調べてみない？もしかしたら使えるかもよ！？」

「そうだね。確か魔道書屋ってあったよね？そこにいこう。」

「魔法かー。俺成績悪かったから使えるか心配だなあ。」

そして魔道書屋に僕たちは入った。中には本がたくさん置いてあり、図書館のようになっていた。

「いらつしゃい。どんな魔道書が欲しい？どれも銀貨50枚よ。」

「すいません。僕たちはかなり遠くの故郷からきたので、魔法の事とか何も知らないんです。」

最初から教えてもらえますか？」

「へえ。そつなの？まあ教えてあげる。まず魔法には――」

店主——ミレアさんが教えてくれたことをまとめると、

魔法には炎、水、風、土の一般属性と、光、闇、雷、氷などの特殊属性があつて、個人差はあるけど、

一般属性は誰でも使えるらしい。例外は、氷属性が使える者は、水属性が使えない。

つまり、氷と水はどちらかしかつかえない。（氷属性の人は少ないが）

特殊属性は、才能や遺伝なので普通の人は使えず、使える人はほとんど名家の人間らしい。

その説明だけでも僕たちにはありがたかった。
なぜなら誰でも魔法がつかえることがわかったからだ。

「わかりました。しかし、どうやって特殊属性が使えると判断するのですか？」

「それは魔法を唱えてみないとわからないわね。裏庭でやってみましょう。」

僕たちは、ミレアさんとともに裏庭へいき、魔法を練習をする事となった。

「じゃあ、まずは呪文を唱えてみて。呪文は『炎の玉よ 我を照らせ ファイヤーボール』よ。」

「炎の玉よ 我を照らせ ファイヤーボール！」

呪文を唱えたと3人の前に拳大くらいの火の玉が出来た。しかし、ルークのは少し小さかった。

僕の玉もルークほどではないが、ミナのよりも小さい。

その調子で他の風、水、土を唱えたが、全体的にルークは弱く、ミナは強かった。僕はその中間ぐらいである。

しかし、驚いたこともある。

まず、僕とルークが氷属性だったこと。それとルークは風と氷の属性が得意なこと。そして、僕は圧倒的に土属性が使えないこと。（かわりに風は凄かった）

自分だけ氷属性でなかったことにミナは不満そうだった。

次は特殊属性を試した。

雷を使ってみた。ルークしか使えなかった。

闇と光は誰も使えなかった。他にもあるが、とりあえずこれだけにしておいた。

店に戻って、一般属性の魔法集と、雷の魔法集の2冊を買った。

これで残金は金貨3枚銅貨20枚となった（服代込み。案外安かった）

今日は疲れたので宿に戻って休むことにした。

荷物を置いて宿で夕食を食べ、3人は二人部屋に集まった。

「これからどうする？冒険者になるか？この町に住むか？」

「僕は冒険者になりたい。この世界を見たい。でも明日はどのみち資金集めになるけど。」

「私もちよつと怖いけど、旅に出たい。今日買った鎧ももつたいないし。」

「やっぱりみんなそうだな！よかった！」

「うん。でも今日は疲れた。早く寝よう。」

「うん。じゃあお休み。」

「おう。不審者に注意しろよ。」

「大丈夫。鍵閉めるし、短剣もあるから。」

ミナは自分の部屋に戻っていった。

「持ち物の整理だけして、寝ようか。」

「ああ。」

僕たちは簡単に整理したあと、鍵を閉めて布団に潜った。
潜ってすぐ、僕の意識は沈んだ。

第三話 身支度（後書き）

新しいジャンルの小説を執筆中…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6155z/>

私たちの異世界生活録

2011年12月27日06時00分発行